

最初この本を手にとったとき、カバーの猫の写真がうちの猫にそっくりの『白黒ハチワレ（トムとジェリーを知っている人は猫のトムに似ている）』だったので、つい読みたくなくなって図書館に借りに行つた。ところがどうやら『白黒ハチワレ』のカバーは限定品で、主人公の猫『ナナ』は本当は三毛猫系の毛並みらしい。でもそれはどうでもいいことかもしれない。猫を飼っている人の多くはこの本を読みながら、自分の飼い猫を『ナナ』に重ねているに違いない。映画などと違って、映像の無い『本』は現実の飼い猫の映像を想像の中で主人公に重ね易い。それも『本』の良いところだ。『ナナ』が雑種でオスなのに『ナナ』というメスっぽい名前なのも、特定の猫種やオスメスを固定しないで、読者が想像を膨らませ易いようにするための著者の仕掛けなのかもしれない。著者の有川浩は『図書館戦争』や『三匹のおっさん』で知られている。余談だが、有川浩がアリカワヒロで女性だということを後で知った。名前や作品のイメージから勝手に男性だと思ひ込んでいただけだし、作品の内容に直接関係するわけでもないのだが、著者が女性だと思つてこの物語を読むと、やはり何となくしっくりするのは気のせいだろうか。

さて、著者の他の作品を見ても、著者はSFではないがちよつと現実離れた設定が得意のようだ。『図書館戦争』は設定が突飛過ぎて映画もあまり面白く思えなかったが、この物語の『動物は人間の言葉を理解している』という設定はすんなり受け入れることができた。なぜなら、猫好きの人の多くは猫が人間の言葉を理解することを願い、実際に少しは理解していると信じている。しかし人間の言葉を理解する動物はストレスが溜まるだろう。自分は相手の言葉がわかるのに、相手は自分の言葉を理解してくれない、一方通行なのだから。ただし『ナナ』は、人は猫の気持ちをわかってくれないものとあきらめている、よくできた猫のようである。

実は私もこの物語と同じように、病院の見舞いに猫を連れて行ったことがある。物語と違って、入院していた妻はすぐに退院したが、うちの猫の反応も『ナナ』とは違っていた。普段はどちらかといえば妻に懐いている猫が、妻の入院中は私に甘えて、私が外出すると一キロ以上も歩いてついてきたりした。猫としてはいたって現実的な対応である。だから、逆に私が死んだとしても、うちの猫たちはたいして悲しんでくれそうにない。こんな会話をするだろう。「あのオヤジ、しばらく見ないと思ったら死んだらしい。」「ちよつとウザいオヤジだったが、それは少し淋しいな。」「問題は家計だぞ。収入が減つてエサも減らされるかもしれない。」「そりゃいかん。おまえ、隣の家に行つてエサをねだつてみるよ。」「…そんな想像をしながら読むのも楽しい。」

ところで、通販サイトのこの本に関する口コミを見ると、飼い主のサトルが亡くなる場面の評価が分かれている。多くは「涙が止まらなかつた。感動した。」と高評価だが、「お涙頂戴でわざとらしい。」と嫌う人もいる。涙を流した人はおそらく、いつか来る自分とペットとの別れ―物語と逆にペットが亡くなることが多い―を想つたのではないだろうか。しかしこの場面は『お涙頂戴』なのだろうか。ペットを飼う以上、別れは覚悟しておかなければならない。例えば他の文学作品等でも、恋人や子供との別れには泣かされるが、じいちゃんばあちゃんとの別れは自然に受け入れるべきこととして描かれることが多いように思う。ペットとの別れもしっかり受け止めて、残された者は前向きに生きて行け、というのが著者の言いたいことではないだろうか。だから物語は、『ナナ』が残り少ない猫生で、後輩猫を鍛えることを決意する場面で終わる。

この後、『ナナ』たちはどうなるのだろうか。『ナナ』に鍛えられた猫は人語も上達して、そのうち人に気持ち伝えることができる猫が現れるかもしれない。あるいは、いつかあの世でサトルと再会した『ナナ』は、サトルと双方向で気持ちを伝え合えるのかもしれない。そんな楽しい未来を想像しながら読む、そして自分のペットと向き合つて暮らしていく。そういう読み方をする物語だと私は思った。